

特集 「祈り」に寄せて

吉 川 真 司

史学研究会が毎年春に例会を開き、一定のテーマによる研究報告と討論を組織し、その成果を翌年の『史林』第一号に特集としてまとめる方式は、すっかり定着をみた。これまでのテーマは、国境・モニュメント・環境・戦争・民族・都市・災害・移動と、外来語そのものの第二回を除けば、ずっと漢字二文字の言葉であった。しかし、今回の特集テーマ「祈り」は初めてやわらかな大和言葉となった。地域・時代・方法をこえた幅広い議論のできるテーマを選んだことに変わりはないとしても、「祈願」でもない「祈禱」でもない「祈り」は、やはり独特の語感をまとっている。

「平和の祈り」「復興の祈り」といった表現が用いられ、善なる意志、純粹な気持ちと結びつけられやすいのが、「祈り」の語感ではなからうか。また「祈り」は「願い」と重なる部分も多いが、「い（斎）」と「のり（宣）」の合成語であるという学説を顧みるまでもなく、つつしんで祈る対象は神仏などの絶対的存在であるのが一般的で、自分よりも上位の人間に「願う」ことがあるのとは違う。この点が「祈り」の語感に深く関わっているように思われる。

しかし、神仏への「戦勝祈願」「朝敵退散の祈禱」のように、その個人・集団以外の者にとって、「祈り」の内容が困ったもの、邪悪なものであることも当然あった。戦争だけではない。例えば、日本の民俗行事「虫送り」は、虫害防除のために行なわれてきたが、虫たちは人々に誘われ村境へと送り出されていく。その村にとって切実な「祈り」の行事も、隣村にすれば迷惑な話で、同じような祭りを実施せざるを得ない。また古代王権が行なった疫神祭でも、王畿への疫神侵入の阻止が祈られたとき、畿外の災厄はおそらく意識されていなかったであろう。

安寧や救済を求める「祈り」が、いかなる個人・集団によって、いかなる対象に向けて行なわれたにせよ、プラスの語

感だけでは捉えきれない意図と機能がそこには存した。そして「祈り」をより有効にするため、まことに多様な儀礼作法と人的組織が形づくられてきた。このような「祈り」の諸形態は、政治史・社会史・文化史とも深く関わり、さまざまな地域・時代を深く理解し、比較するための手がかりとなるものである。

この特集は論説七篇と書評四篇から構成されている。論説のうち五篇は二〇一四年四月の例会報告にもとづくものである。貴重な研究成果をお寄せ下さった執筆者各位に、心から御礼申し上げる。

各論説は、文字どおり古今東西の「祈り」をめぐる諸問題を扱っている。①松尾充晶氏は、出雲国という地域に立脚して、『出雲国風土記』と考古資料から日本古代の神祇祭祀、すなわちカミへの祈りの具体相を明らかにする。②坪井剛氏は、教祖法然の死後、極楽往生を祈る「専修念仏」の僧侶集団がどのように展開したかを詳細に跡づけ、日本中世宗教史研究に一石を投じる。③青谷秀紀氏は、ヨーロッパ中世のバーチャル巡礼や都市民の宗教儀礼における「聖地の表象」を論じて、私的な祈りと公的な祈りの連続性を主張する。④水越知氏は、重慶府巴県の『巴県档案』に含まれる宗教関係史料を多数紹介し、中国近世の民衆的・日常的な祈りについて実態的研究の方向性を示す。⑤森正人氏は、日本近代の四国遍路に文化地理学的考察を加え、観光・運輸産業の影響で改変、そして再構築された祈りの物質性・身体性について論じる。⑥横田貴之氏は、ムスリム同胞団の創設者バンナーの思想が、個人的信仰を行動へ組織していった回路を、二〇世紀前半の政治社会状況に即して究明する。⑦山本昭宏氏は、被爆地広島語られ方を分析し、占領下に「祈り」と結びつけられた都市イメージが、朝鮮戦争を機に「怒りの広島」へ転換したとする。また、桑原久男氏・渡辺康代氏・矢島洋一氏・山中聡氏は、「祈り」に関わる近年の注目すべき研究書について、周到かつ的確な書評を御執筆下さった。おかげさまで地域と時代の幅がさらに広がり、「祈り」の諸形態を豊かに認識することが可能となった。

この特集号を契機として、「祈り」に関わる研究がいつそう進むことを（善なる意志により）祈念するものである。